

田村喜子

海底の機
うなぞこのはた

文化出版局

海底の機

田村喜子

田村喜子（たむら・よしこ）

昭和七年、京都市生まれ。京都府立大学文学部卒業。都新聞社報道部記者を経て文筆生活に入る。主な作品『むろまち』（修道社）『京そだち』（新潮社）。

現住所／東京都練馬区大泉学園町七四二

海底の機

定価

一三〇〇円

昭和五三年七月二三日第一刷発行

著者

田村喜子

発行者

大沼 淳

発行所

文化出版局

東京都渋谷区代々木三一二一

郵便番号

一五一

電話（〇三）三七〇一三一一（代表）

振替

東京二一九五六七〇番

印刷所

精興社／文化カラー印刷

製本所

和田製本

海底の機

装丁
栗津潔

織屋の衆にこれだけの負担をかけたなら、いずれ不平や不満が出ることやろう……。

竹内作兵衛は片肘を帳場について溜息をついた。

表の紅殻格子を通して、朝日が畳の上に縞模様を描いていた。

彼は首をねじって背後の糸戸棚を見上げた。その中には彼の機場はたばで織ったのや、出機でばたに織らせた西陣織物がぎっしり詰まっていた。

表戸が勢いよく開いた。

「ごめんやす。毎度おおきに」

入って来たのは糸間屋菱田屋の番頭、吉田忠七だった。たっぷり結った町人髷に唐棧の着流しがいつ見ても小粋だった。

忠七のうしろから丁稚がついて入った。丁稚縞の筒袖に紺前垂れの小柄な丁稚は体の半分もある大きな荷を背負っていた。

丁稚は花形屋の上がり框に背を向けて荷を置くと、ふうっと大きな息を吐いて首もとで結わえた風呂敷の結び目を解いた。かせに巻いた生糸の束に陽が差して、銀色の光沢が映えた。

「いやあ、驚きました。いまそこで日和田屋さんの御一行に会いましたけど、まるで侍のような格好をしてはりましたわ。あの格好で大阪方面へ商いに行かはるのですて？」

作兵衛はにが笑いを洩らした。

「西陣物産会社の惣代は士分を許されてまっさかい……」

「売り先がなくなってもたさかいに、かつては禁裏やお公卿さんや大名がたのお召物にしか使われなかった西陣織物を、堺や大阪の町人に売ってつかわすとも言うんですかね」

「それは口が過ぎますぞ、忠七さん」

作兵衛のたしなめに、忠七は悪びれた顔もせずと言った。

「あんな格好で商いができますのか？ 御一新で世の中は変わってしもたんどっせ。それやのに西陣は昔からの格式にしがみついて、なにひとつ改めようとしてしまへん。禁裏や將軍家の需要が無くなったとなれば、どうして新しい売り先をもっと積極的に求めしまへんのや？」

「言われるまでもおへん。諸国商人や素人売りなど、できる限りのことはしてますわ」

「そんな消極的なことではあきまへんわ、花形屋さん。もっと広う販路を拡げるのどす」

「これ以上どこへ売りに行く当てがありますのや？」

「外国どす」

「外国？」

作兵衛はあっけにとられて聞き返した。

「へえ、わしは糸の商いで横浜や神戸に出向くことがよくありますので、外国の織物を見る機会もようあります。西洋の織物は輝くように美しい色をしています。そやけど西陣の織物はそれにひけを取らん見事なものやと思います。伝統的な技術では西洋のものに負けてしまへん」

作兵衛は茫然と忠七を見たまかすかにうなずいた。

「そやさかい、これからは外国人の好みを研究して、外国にも適するような西陣織物を織り、外国へ売り込むのどす」

作兵衛は忠七の通った鼻筋に強じんな意志を感じた。

忠七は気負っていた。

彼は続けた。

「しかし、そのためには量産もせんなりまへん。生産価格を下げる必要もあります。いまみたいに一反を織りあげるのに数十日もかかっていては、織りあがったころに糸代が暴落して、せっかくの製品が手間損ということにもなり兼ねまへん。もっと速う織れる機械が要ります」

「そんな機械がありますのか？」

「いいえ、いまのところはあらしまへん。西陣の紋織りは高機でないと織れしまへんが、これは奈良時代に唐から入って来たものどす。それ以来、ほとんど改良もなしに使われてます。しかし、これを改良して、もっと速う織れるようにするとか、手間を減らすとか、工夫するのどす」

「あんたは、いつからそんなことを考えてはりましたんや？」

「いや、まだ考えついたばかりどす」

「それで、ええ機械の知恵は出ましたか？」

「まだどす」

忠七はあっさり答えてにっこりした。

その目が澄んでいた。

忠七は糸屋の番頭だが、手代のころから花形屋に出入りしており、毎日欠かさず顔を出してひと言、ふた言軽口を叩きながら確実に商いをしていく男だった。磊落かと思うと生真面目で、誠実味のある忠七に作兵衛は目をかけていたし、時には親子ほども年齢のちがう忠七から教えられることもあった。

西陣の機の改良を熱心に説く忠七は、逼塞した西陣の立直しを西陣の人間以上に考えているのかもしれないと作兵衛は思った。大阪や堺へ滞貨を売込みに行くより、もっと広く——忠七の言うように——外国にも販路を拡げること考えるべきかもしれないのだ。

彼はつい先刻、二台の荷車に西陣の織物を満載して出発した日和田屋沢田新七に思いを馳せた。

「では、これより行って参じまする」

町人髷に羽織袴、二本帯刀の新七は、とってつけた侍口調で挨拶した。

「お役目ご苦労に存じます。沢田様も御一同様も、道中十分お氣をつけなさいますよう」

作兵衛が深ぶかと腰を折るのに肩肘張ったお辞儀を返して、新七は荷車の先頭に立った。丁稚の曳く荷車をもう一人の丁稚が後を押し、日和田屋の手代のほかに西陣物産会社の肝煎きもいりでもある織屋のあるじが二人、行を共にした。

作兵衛は一行が大宮五辻おおみやいつつじの角をまがるまで門口に立って見送った。口もとには愛想笑いが浮かんでいたが、ひたいには深い縦じわが刻まれていた。

大名相手の商いに馴れた堺や大阪のあきんどを相手にして、西陣の織屋が齒が立つわけがない、と彼は腹の中で思っていた。

二台の荷車に満載された西陣織物は、彼の目から見れば粗悪な製品だった。海千山千の堺のあきんどに、これが西陣織物だとして売りに行かねばならないのも屈辱だが、商品が売り捌けず、売れても買い叩かれたりしたら、結局彼や沢田新七ら西陣物産会社の世話役が自腹を切らねばならないことは明白だった。

彼の胸には京都府から借り入れた勸業資金の返済が重くのしかかっていた。返済期日はとうに済んでいた。再三の延期嘆願書を作兵衛は書いた。これ以上はお聞き届けくだらないだろうと恐れながら、彼は書いたのだった。

明治初年の京都には津波の引いたあのような寂寥感が漂っていた。

明治二年三月二十八日、車駕東幸という事実上の東京遷都で、京都は千年にわたる都としての地位を失ったばかりだった。

天皇の東幸に伴い、公卿、諸侯、官僚もことごとく東遷し、有力町人の中にも東京へ移るものが相次いだ。維新当時は各地からの諸侯や藩士、商人らが集まって膨張していた京都の人口は急減した。

王政復古によって名実ともに新政府の政治的中心になるという京都市民の強い期待は無残に碎かれたのである。

さらに追討ちをかけるように、秋には皇后の東行が決定した。

「天子様の御東幸は時世の移り変りでは是非もないが、中宮様は永久に京都に住まわせられたい」京都の民衆は俄然さわざだした。

明治元年十二月十八日御入内された一条忠香の三女美子寿栄君は、即日立后され、ついで中宮

の称を廃して皇后と称することとなっていたが、京都市民は長年の呼び慣わし通り、中宮様と呼び馴染んでいたのだった。

市中到るところに行啓反対のビラが貼られた。朔平門前広場から東猿ヶ辻辺りには、毎日数百人の民衆がすわりこんだ。九月二十四日には数千人が行啓反対、あるいは中止嘆願の旗幟を押し立てて、石薬師門いすくしもんから御所に雪崩れ込み、朔平門さくへいもんから常御殿の皇后宮御住まいの方へ押し寄せ、東京行啓中止の直訴に及んだ。

明治二年十月五日、皇后は東京へ発興された。廃都の感を深める市民慰撫のための行政措置として、新政府は地子銭を免除し、勸業資金として十五万円を京都府に交付した。

大舍人座のむかしから權威の庇護を受けて来た西陣が、大政御一新によって受けた打撃は大きかった。西陣というのは、応仁の乱（一四六七—一四七七）で細川勝元の東の陣に対する山名持豊の西の陣が置かれた地にその名を由来するのであるが、ここで織り出される高級織物の基盤は平安時代の律令制下に官営事業として織部司を中心に行われて来たもので、織部司は禁中で用いられる各種の織物類をはじめ、神仏に奉獻する御服や群臣に贈る綾羅の製織を主に行っていたところである。平安時代官制の一部改正で、天皇の御装束類の織物は中務省の内蔵寮で製造調進されるようになり、錦や綾の製産は織部司以外でも行われるようになった。平安中期以後政治的紊乱によって、織部司は次第にその公的機能を失い、中世に入って官を離れた内蔵寮や織部司の工人

たちは、織部司町に近接の大舎人町で民営機業を始め、その伝統的技術を伝承したのである。

応仁の乱の勃発で織工たちは戦火を逃れて山口や堺に四散し、大舎人座は廃滅状態となった。

やがて都を焦土と化した大乱は治まり、新町今出川上ル元新在家町辺の白雲村に戻って来た織工たちは、ここで機業を再開した。十数年にわたる空白の時期のあと、彼らは紋羅のような伝統的織物を消滅させた代りに、唐織や金欄、緞子、縮緬などの新規織物をもたらしただった。

その後天正年間（一五七三—一五九二）に西陣の本陣跡に移り、ここに西陣機業は開始されたのである。

往古から西陣は禁裏、公卿、將軍家、旗本、大名、さらに寺社や富裕な町民を対象とする高級織物の産地であった。したがって幕府の崩壊、廃仏棄釈など御一新によって西陣が受けた打撃は、かつて幾度か経験したような天災地変による災難ではなく、政治改革のための需要層の崩壊と服装の大転化によるものであった。

西陣は深刻な不景気に陥った。織物の需要の衰えに加えて、織屋は仲買の巧妙な商略にのせられ、仲買の入札通りに投売りせざるを得ない立場だった。

西陣では生糸の仕入れ、織物の売買は必ず仲買を通す習慣があった。したがって製品の価格は仲買に左右され、しかもその代金は三十日から五十日後でなければ入手できず、織屋はしばしば生糸を高価に買い入れて、製品を安価に売り渡さねばならないはめになった。大体に於て西陣の

仲買は資産を有し、織屋に資金を貸し付けることでその織屋の製品を押さえ、あるいは伏せ機^{ばた}と
いって一切の製品の販売権を獲得していた。そのため織屋は自家の製品を自由に販売することが
できず、常に資金不足に苦しみながら、仲買に依存する態度を改めようとしなかったのでは
ある。要するに商権は全く仲買の手にあったと言っても過言ではなかった。

こうして西陣はますます逼迫の淵に落ちこんでいった。しかし滞貨をかかえてなお西陣四千九
百戸の織屋から篋^{おき}の音は絶えなかった。織ることしか生活の方法を知らない西陣の織職人にとっ
て、織ることをやめることは生きることと捨てることであった。年間百万点にのぼる製品が産出
され、しかも御一新で茫然自失の状態になった職人たちの織るものは粗悪に流れた。

西陣の織屋は大多数が一軒に一台の機を持つ小規模なもので、有力な織屋でさえ五、六台の機
と数人の出機を持つに過ぎなかった。

政変後、彼らは封建時代からの仲間制度を廃止し、新たに西陣物産会社を設立した。いわば全
西陣の組合団体で、模様社、金欄社、紗織社、博多社、繻子社、夏衣社、真古帯社、綸子社、縮
緬社、羽二重社、古帯社、緞子社、木綿社、天鷲絨社、真田社、精好社、絵絹社、練絹社の十八
社から成っていた。各社には三名の肝煎を置き、合計五十四名の肝煎は京都府から公任役人の資
格を得、会社の役員は世話役と称して、京都府が任命したものだった。世話役は帯刀を許され、
士分の待遇を受けていた。

西陣が御一新による打撃から立ち直るためには多額の資金が必要だった。西陣物産会社は新政府が京都府に交付した勸業資金十五万円のうちから三万円の資金を借り受けた。この資金で会社は西陣の織屋の滞貨を一括集荷し、まず先行き不安におののいていた職人たちの蘇生を計った。一括集荷した商品は一手入札販売することにした。しかし会社を持ち込まれた滞貨の山は思惑通りに売り捌けなかった。売上金を借入金返済にあてるつもりで物産会社の思惑外だった。明治三年七月末日返済の期日を十月末日までに延期嘆願し、十月末になっても返済は不可能だった。「乍恐奉願上候口上書」作兵衛はその都度京都御政府へ嘆願書を書いた。

西陣物産会社世話役たちは、滞貨を売り捌く手段として、「諸国商人及素人売」の駒札を作り、三条、四条、五条の橋詰、七条西洞院、堀川下立売、大宮寺ノ内、今出川寺町のほか各街道の京の入口に立てた。一、三、六、八の日には市場を開いて宣伝、販売につとめた。その上私財を投じて、遠く大阪、堺方面へまで販路をのばそうと試みてもみたのだった。

沢田新七の一行を見送ったあとも、作兵衛の心には薄雲がかかったように不安が晴れなかった。結界のついた帳場にすわって、彼は思案にふけた。

京都府に対してこれ以上上納延期嘆願は無理だろう。この上は物産会社に所属する全機業家の責任として、機別出銭による集金に踏み切るしかない。広幅織機一台につき月二十五銭、逼幅織機一台につき月十二銭五厘、木綿織機はその半額の六銭二厘五毛……しかしその場合必ず持ちあ

がる織屋からの不平や不満を思うと、作兵衛は気が重かった。

そんなとき、忠七の西陣改革論は新鮮な響きを伴って作兵衛の心にくい込んで来たのだった。

忠七は丁稚の背負って来た生糸の束を花形屋に納品すると、四隅をていねいに端刺しした一反風呂敷を三角に折り、さらに細く折り畳んで二つに折りまげた。細長くなった風呂敷の先を結び合わせて、彼はそれをぼんと丁稚の肩に載せた。

「おまえは先にお帰り」

「へい、ほな、番頭さん、お先に」

丁稚は風呂敷をひよいと肩に載せて店を出た。うしろから見ると、風呂敷の結び目は、まるで丁稚の背に大きな蝶がとまっているように見えた。

忠七は上がり框から腰を浮かせた。彼は戸口とは反対の、通り庭にある台所との境にかけた三幅の長のれんに手をかけた。長のれんには花形屋の屋号が紺地に白く染め抜いてあった。

西陣物産会社の世話役惣代をつとめる竹内作兵衛の営む花形屋は、西陣でも大手の織屋だった。五間口は紅殻格子に覆われ、三尺の戸口を開けると店の間が土間に面している。店の間は十畳ほどの広さで、奥にどっしりと黒光りする糸戸棚が並んでいる。古くなった酒を雑布にしませて拭きこんであるので、つやつやしている。商いは店の間で行われる。戸口から奥へは通り庭が通じている。境の長のれんを開けると、通り庭に面して台所があり、その奥が機場^{はたば}になって

いる。織屋^{おりや}建ちと呼ばれる織屋独特のつくりで、裏庭に面した機場は十坪ほどの土間である。吹抜きの屋根にはいくつか明かりとりの窓がとってあり、屋根裏は頑丈な梁^{はり}が交差している。梁には搦縄^{かろなわ}が懸けてあって、その先は機の千切^{ちきり}に繋がれている。

西陣織物の紋柄や色の取合せは元来各織屋が創り出す独自の意匠であって、機にかかっている絹を外部のものに見せることはめったにない。まして糸屋の番頭のように何軒もの織屋に出入りしているものが機場に入るとは避けねばならないのだが、いつの間にか花形屋では、忠七だけは特別の扱いを受けるようになっていた。

忠七が仕切りの長のれんを開けると、機場から囁し唄が流れ出た。織手たちが口まかせにうたう流行り唄だった。

「このたび（足袋）は合うか長吉はいてみや

シューッ トン シューッ トン

小倉百人一首の初めの五字だけ取った小倉づけの唄に、桴^ひの走る音と、桴をオトコに置く音が混じる。

花形屋には五台の高機があった。高機は空引機^{そらびきだて}とも言われ、西陣織特有の紋柄を織り出すために経糸^{たていと}を上げ下げする花楼^{へだな}が機械の一段高いところについている。花楼板^{へだないた}には空引手が腰かけていて、足をつっぱり、力を入れて通糸^{つうじ}を引くことによって経糸を引きあげる。機の両側の台をオ